令和3年度厚生労働省委託事業

地域産業連携ガイドブック

障害者就労における地域の産業と福祉の連携推進事業

目次

１．はじめに …… 1
２．なぜ今、地域産業×福祉 という発想が必要なのか …… 2
３．地域産業と福祉の連携の主なイメージ …… 3
４．連携による地域企業等のメリット …… 3
５．地域産業型福祉に取り組んでいる事業所の特徴 …… 4
６．期待される連携効果 …… 5
７．事例から地域連携を考える …… 6
（事例１）伝統工芸① 縁 …… 7
（事例２）伝統工芸② ワークくわの木金城第２事業所 …… 9
（事例３）伝統工芸③ ＷＩＳＨ …… 11
（事例４）伝統工芸④ 幸呼来Japan …… 13
（事例５）地域活性① ソーネおおぞね …… 15
（事例６）地域活性② にじいろ …… 17
（事例７）地域活性③ インクルーシヴ・松山 ヒカリのアトリエ …… 19
（事例８）地域活性④ GENIUS …… 21
（事例９）地域活性⑤ 日本海倶楽部 …… 23
（事例10）地域課題解決① ヴィ長屋 …… 25
（事例11）地域課題解決② JOCA×３（じょかかけさん） …… 27
（事例12）地域課題解決③ San-fuku（さんふく） …… 29
（事例13）地域課題解決④ スタジオれもん …… 31
（事例14）地域課題解決⑤ 社会就労センターぴいす …… 33
（事例15）地域課題解決⑥ カーマン …… 35
（事例16）地域課題解決⑦ 盛岡書房 …… 37
（事例17）地域課題解決⑧ 直売所カフェこころや …… 39
（事例18）地域課題解決⑨ 白潟事業所 …… 41
（事例19）地場産業① こだかさ障害支援センター …… 43
（事例20）地場産業② まこと（松前事業所） …… 45
（事例21）地場産業③ まちかどステーション八百萬屋 …… 47
（事例22）地場産業④ エコテリアなんぐん市場 …… 49
（事例23）地場産業⑤ がんばカンパニー …… 51
（事例24）六次化商品① 雫石町福祉作業所かし和の郷 …… 53
（事例25）六次化商品② ひまわり畑 …… 55
（事例26）リサイクル素材① みちのく屋台こんにゃく道場 …… 57
（事例27）リサイクル素材② あおぞらソラシード …… 59
（事例28）リサイクル素材③ アイラブ作業所 …… 61
（事例29）リサイクル素材④ 深谷たんぽぽ …… 63
（事例30）リサイクル素材⑤ ドルフィン・アイ、グレースハウス …… 65
８．地域産業連携型福祉の取り組み手順 …… 68
９．企業の皆様へ …… 69
10．共同受注窓口一覧 …… 70
事業所・連携先一覧（リスト） …… 71

1 はじめに

農福・林福・水福の各連携では、一次産業と障害福祉の協働により障害者の就労機会の拡大、工賃・賃金の向上、また高齢化や人手不足が課題となっている農林水産業の活性化に好影響をもたらしています。

また、内閣官房のまち・ひと・しごと創生戦略においては「将来にわたって『活力ある地域社会』の実現」を目指すことが謳われており、その横断的目標の１つに「多様な人材の活躍を推進する」ことが挙げられています。総合戦略は、新型コロナによる社会情勢の変化を受け、改定が加えられ、地方への関心の高まり、人の流れ、企業の意識・行動変容にも目を向けながら新たな地域創生を進めようとしているところです。

こうした状況をみると、全国各地で地域密着の生産活動を行っている就労継続支援事業所が、農福連携にとどまらず、あらゆる地域の産業と連携し、プレイヤーとして活躍することへの期待がますます高まっていると言えます。

就労継続支援Ａ型・Ｂ型事業所が地域産業の担い手となり、それによって利用者の就労の充実や賃金・工賃の向上につなげることは、福祉の観点からも地域活性の観点からも大変望ましいことです。

このガイドブックでは、すでに、地域産業連携といえる企業と連携して成果を挙げている福祉事業所や、地域課題の解決をビジネスチャンスととらえ、地域を巻き込んで事業を展開している福祉事業所の事例をとりあげ、ご紹介しています。

これから取り組みたい就労継続支援事業所はもちろん、福祉とのコラボレーションで事業振興と地域貢献を実現したい企業の方にもご覧いただき、参考にしていただければと思います。

2022年3月
株式会社FVP

本事業でとりあげる地域産業連携には、農業、林業、水産業と福祉の連携、資源リサイクルによる製品製造、伝統工芸品の製作、大学や自治体との連携等が含まれます。中小企業庁のホームページには、施策として行う地域産業支援として「地場・伝統的工芸品産業などの地域産業の活性化を目指す支援」と記述があり、本事業における地域産業についても、「地域資源を有効に活用しながら地域に根差した経済活動を担う産業全般」を対象としてとらえ、福祉とのマッチングにより、これらの地域産業の活性化に寄与するモデルづくりを目指します。

2　なぜ今、地域産業×福祉　という発想が必要なのか

就労継続支援事業所は、障害のある方に生産活動を通じて就労の支援を行っています。食品や手工芸品等の自主製品、企業からの受注作業など、多種多様な事業に取り組み、工賃・賃金の向上を目指していますが、新型コロナ感染の影響も受け、就労継続支援Ｂ型事業所の平均工賃は、15,776円（令和2年度）と低迷し、就労継続支援Ａ型事業所の多くは事業収支マイナスの状況が続いています。

地域の企業から下請けの仕事を受注することも、ショッピングモール内で自主製品の販売イベントを行うことも「地域産業との連携」の一つです。ただ、今回、改めて「地域の産業と福祉の連携」をとり上げているのには理由があります。これまで地域の福祉事業所は「何か私たちに仕事をください」「私たちの作った商品を買ってください」と地域の企業や団体、市民に対して協力をお願いしてきた傾向があります。障害者理解・啓発という点では大切な取組です。しかしながら、福祉施設が取り組む「生産活動」は立派な「経済活動」であり、商品やサービスを通じて、お客様や地域社会の役に立つことができるのだと考えれば、事業可能性をもっと広げられるのではないでしょうか。地域の産業や地域の抱える課題に目を向け、企業、自治体、地域団体と連携してさまざまな成果をあげている福祉事業所はすでに全国にあります。

「地域産業×福祉」が期待される背景・理由を整理してみました。

１．地域で働く障害者に対する社会の認知が広がっていること

農福連携の推進、障害者雇用の広がり、クラウドファンディングやSNSを通じて福祉事業所の活動や商品を知る機会が増えたことなど、障害者が多様な働き方をしていることが広く認知されるようになりました。繁忙期の農作業に取り組む障害者は農家にとって貴重な戦力になっています。SDGsの観点からも福祉事業所とのコラボレーションに興味を持つ企業が増えています。

２．生産活動の新陳代謝が必要であること

従来から取り組んできた生産活動の中には、市場がそもそも小さかったり縮小しているものがあり、事業転換が必要になっています。企業から仕事を受注する場合も、市場の変化に応じた対応が求められます。事業の新陳代謝を進める過程で、地域に求められる商品・サービスを選択することは自然な流れです。人手不足で困っている企業や後継者難で技術の継承が危ぶまれる産業に福祉事業所が関わり、障害者の仕事として連携することができれば、企業にとっても困難を乗り越えるきっかけになるのではないでしょうか。

３．人口減少、8050問題、社会的孤立・・地域全体で取り組むべき課題解決に、福祉事業所として参画する意義

地域が抱えるさまざまな社会課題は地域全体で取り組むべき課題です。地域を巻き込み、課題解決に取り組むことは福祉事業者としてのミッションでもあると思います。生産活動という手段を使って地域に貢献することは、障害者が支援を受ける存在から、支援する側に回ることを意味しており、共生という意味でも大きな意義があると思います。

3 地域産業と福祉の連携の主なイメージ

地域産業と福祉の連携の具体的なイメージは以下のようなものです。

六次化、地場産業、伝統工芸、リサイクル素材を使った商品開発、地域課題解決、地域活性等々。地場産業の中には特産野菜の加工品や伝統工芸の生産・販売も含まれますので、それぞれのテーマが明確に分かれるわけではなく、重なる部分もありますが、こうしてみると、福祉事業所がこれまで取り組んできたことも近いイメージを持たれる方も多いと思います。見方を変えれば、これまでの経験を生かしつつ、改めて地域の産業やその価値に目を向けると、事業所で働く利用者の皆さんの活躍の場がまだまだありそうです。

六次化商品 × 福祉

・特産野菜・廃棄食材・有害鳥獣などを使った商品開発
・農福・水福・林福から生まれた地域の特産品づくり　等

地場産業 × 福祉

・社員の高齢化や人手不足を課題とする地場産業企業への施設外就労
・地場産業を取り入れた自主製品開発　等

伝統工芸 × 福祉

・織物、和紙など伝統工芸品の製造工程の一部を事業所が担当
・伝統工芸品の製造技術を用いた自主製品の開発　等

リサイクル素材 × 福祉

・廃棄される商品を再利用して作った自主製品
・環境問題対応して商品・仕組みづくり　等

地域課題解決 × 福祉

・高齢者支援
・空き店舗対策
・防災活動
・自治会活動の維持
等に事業所が生産活動の一環で参画　等

地域活性 × 福祉

・観光振興
・町おこし
・Ｕターン、Ｉターンの雇用創出
・交流人口・関係人口拡大
などに寄与することで、生産活動にも好影響　等

4 連携による地域企業等のメリット

地域の企業や団体、自治体等が福祉事業所と連携するメリットには以下のようなことが挙げられます。

福祉事業所というハブを使った社会貢献型ビジネスの実現

地域に点在する就労継続支援事業所は、事業を通じて地域福祉に取り組んでいます。CSR（企業の社会的責任）から CSV（共通価値の創造）へのシフトが進む中、地域に根差し、事業と福祉の双方にフィールドを持つ福祉事業所をハブとして連携・活用することは、企業の目指す社会貢献型ビジネスを実践する上で有効な方法です。

経営マネジメント面の改善効果

農福連携は農家にとって「売上・収益の向上」につながる有効な手段の一つと評価されています。障害者が働きやすい作業手順や環境を整備することが従業員の意欲向上や生産性向上につながったという声も挙がっています。他の産業においても、障害者の適性に合わせた仕事をマッチングさせることにより、同様の効果が期待できます。

商品・サービス品質の向上・訴求力の向上

障害のある人の中には、繰り返し作業が得意な人、正確性を追求できる人など、細かな手作業に向いている方たちがいます。技術の習得には時間がかかるかもしれませんが、品質向上に寄与できる可能性は大いにあります。また、福祉施設の取組は地域の共感を呼び、訴求力も期待できるでしょう。

奥行きと継続性のあるSDGsの取組

環境問題への対応やリサイクルなどＳＤＧｓの取組が活発になっていますが、さらに地域の福祉事業所をパートナーに加え、障害者の就労促進に寄与することで「貧困をなくす」「不平等をなくす」「住み続けられるまちづくり」など取組のインパクトは大きなものになります。障害者を巻き込むことは地域を巻き込むことであり、その責任は大きくなりますが、やりがいのある取組になることは間違いありません。

5 地域産業型福祉に取り組んでいる事業所の特徴

全国の福祉事業所の中には、すでに「地域産業連携型福祉」といえる事業展開で、存在感を発揮している例が見られます。その特徴は以下のとおりです。

ハイクオリティな自主製品が地元企業を呼び寄せる

モノづくりを行っているメーカーや、魅力ある商品を探している流通企業は、福祉事業所が作っている高品質の商品に注目しています。自主製品の品質が高く安定していること、製造・販売の実績を地元企業の社長さんはよく見ています。モノづくりで地域の企業と連携している事業所は、もともと作っていた自主製品の高い評価を基盤として、コラボレーションにつながる例が多く見られます。

企業や団体に「こことぜひ一緒にやりたい」と思わせる特徴（強み）を持っている

「伝統工芸をモチーフにしたデザインの商品を作りたい」「自社の仕事の一部をアウトソーシングしたい」「どんな仕事ができるのかわかれば、施設に作業委託をしてみたい」。企業の担当者がそう考えたときに、企業が求めている期待に応えられるかどうかがポイントになります。 連携実績を持つ事業所は、地元の経営者が安心するような強みを持ち、それをしっかりと伝えています。「小口の注文も受けられる」「人手がある」「製造機械を持っている」などリソースを示すことも企業の安心感につながります。

地域の困りごと・地域課題にアンテナを張っている

福祉事業所は地域との良好な関係なくして成り立たないことを考えれば、地域課題に関心を持つことは基本と言えるかもしれません。今、地域では誰がどんなことに困っているか、に着目したり、地域で元気を失いつつある産業を維持・発展させるためにできることはないかという視点で考えることは、地域福祉の観点からもビジネスチャンスという点でも重要です。

地域産業連携型福祉の実績を持つ事業所は、地域の経済団体の会員となったり、自治会や商店街の活動に参加して、地域を支えながら、経営者人脈を作っていることも確認されました。活動を通じて、地域の生きた情報をつかんでいます。

地域の福祉事業所が連携し、発信している

企業が福祉事業所に関心を持ち、連携を考えた時に最初に問い合わせる先としては、県や市に作られている「共同受注窓口」が利用されていることがわかりました。新聞やメディアで福祉事業所の取組を目にしたことがあるが、いざ、声をかけようと思った時にどこに連絡すれば良いかわからない、ということはよくあり、共同受注窓口や事業所ネットワークの存在や活動を日頃から発信しておくことは連携のきっかけを作るうえで有効です。

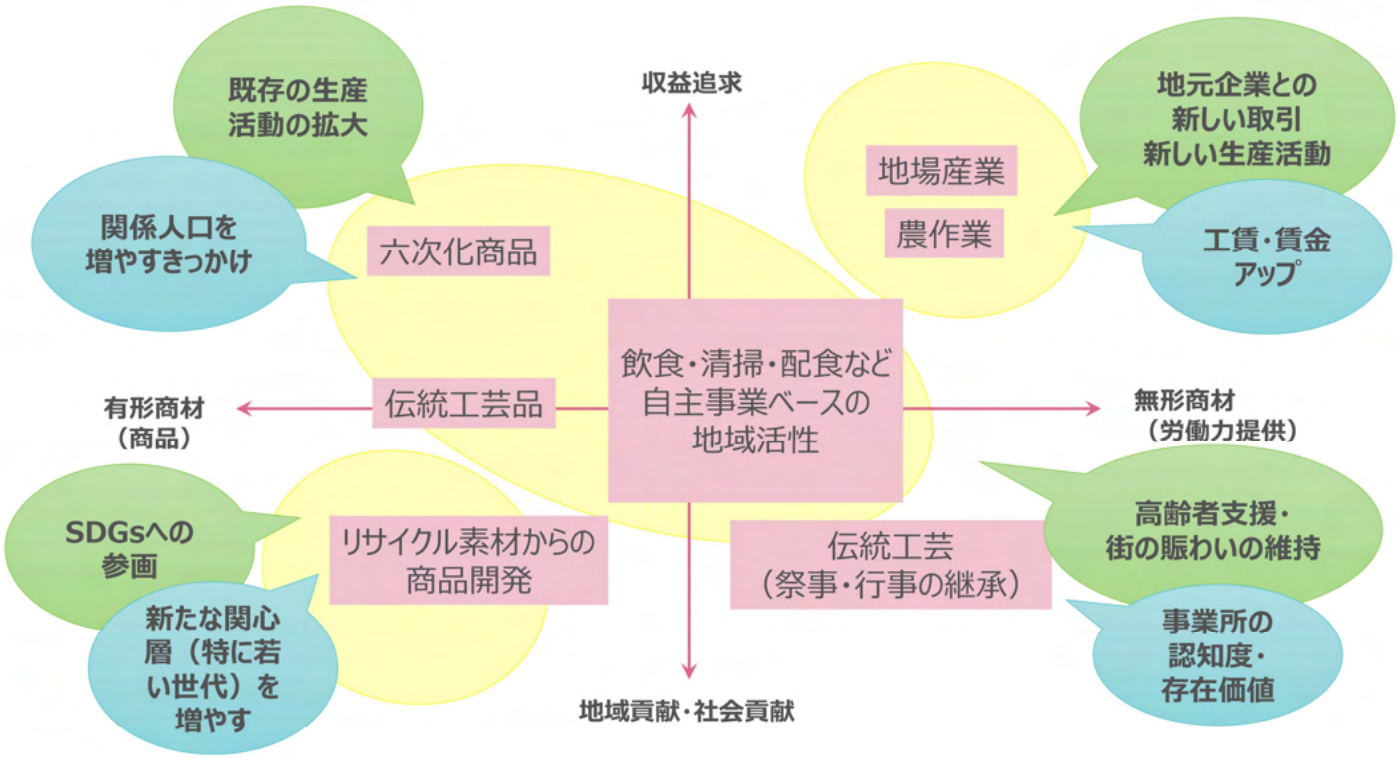
6 期待される連携効果

地域産業型福祉にはさまざまなテーマが考えられますが、福祉事業所が取り組むうえでは、何を目指して取り組むのか、その目的を明確にしておくことが重要です。下図は、縦軸に「収益追求」と「収益よりは地域貢献・社会貢献」という軸、横軸に「有形商材（形のある商品）」と「無形商材（サービスや労働力の提供）」という軸をおいて、連携テーマごとにプロットしたものです。

地場産業や六次化商品については、生産活動としてもイメージしやすく、利用者の適性に合わせた職域を設定し、生産性を追求することで、売上・工賃の向上に寄与する事業になる可能性が十分あると思います。

一方で、リサイクル素材の商品開発や伝統工芸に係る連携については、最初から高い収益を目指すのは難しい側面があると考えます。ただ、環境問題やSDGsに関心の高い若い世代が福祉についても知るきっかけとなる点では、将来への希望を感じる連携ですし、地域の文化を絶やさず次の世代につなぐ役割を福祉事業所が担うことになるのであれば、その意義は大きなものです。利用者のやりがいや誇りにつながる取組にもなるでしょう。

図の中央にある、これまで福祉事業所が取り組んできた事業の拡充による「地域活性」テーマの連携については、4象限のどの方向性でも可能性を広げることができると思います。



7 事例から地域連携を考える

この冊子では、全国の地域産業連携型福祉の事例を紹介します。「地域産業との連携とは何を指すのか」を探りながらの事例収集でしたので、目新しい事例というよりは、今まで取り組んできたことの延長戦上の事例が多いかもしれません。ですが、ここで紹介した事例をきっかけに、地元企業との連携を強化したいと考えた時には、この冊子を使って地域の企業や団体に働きかけることで、ともに地域の課題を解決しようという新たな連携を生み出すことができるのではないかと考えています。企業の方にも見ていただきやすいよう1事例2ページで構成した事例になっていますので、類似する連携を作りたい場合には、是非該当ページを企業の方にも見ていただき、営業ツールとしてご活用ください。

連携テーマ	内容	ページ
伝統工芸	石見神楽、若狭塗り箸、三原だるま、東北地方伝統の裂き織りなど、地域に古くから伝わる伝統工芸品づくりと福祉の連携事例	7~14
地域活性	観光振興に貢献する土産物の開発、地域の賑わいづくりなど地域の企業や団体とともに地域活性に取り組む事業所事例	15~24
地域課題解決	高齢者の健康維持、見守り、買い物支援、地域コミュニティの維持・活性化、棚田の維持、民間企業が受託しにくい役務の受注など地域の企業や自治体の要請に応じた地域課題解決に取り組む事業所の連携事例	25~42
地場産業	農林水産業や地場産業とコラボレーションした特産品開発など地場産業と福祉の連携事例	43～52
六次化	地元の生産者、一次加工業者と連携して取り組む六次化商品の開発事例	53～56
リサイクル素材	木材の再利用、自然素材だけで作るアウトドア用品、制服やユニフォーム、シートベルトなど自動車パーツの再利用など、循環型得エコノミーを創出するリサイクル素材のアップサイクル商品の開発事例	57～67

伝統工芸×福祉

福井県
小浜市

若狭塗箸の老舗メーカー
株式会社イシダ

就労継続支援Ｂ型事業所
株式会社縁（ゆかり）

株式会社イシダのショールームに
展示されている若狭塗箸

一本一本手作業で行う

イシダのブランドのひとつ

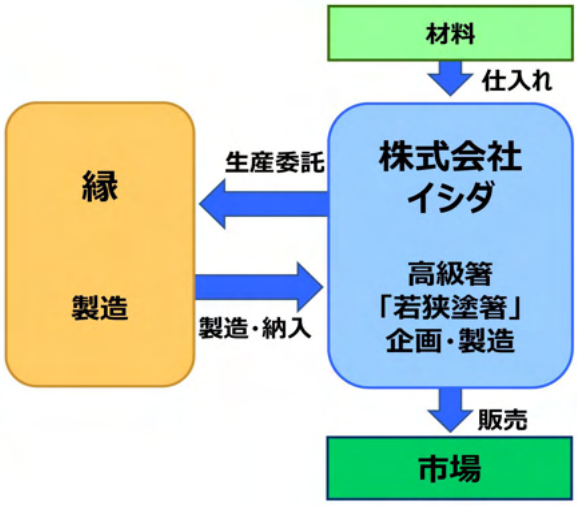
製造中の箸

製品となった箸

連携の概要

「小浜市を代表する伝統工芸品“若狭塗箸”の製造工程で連携」

福井県小浜市で創られる箸は若狭塗箸と呼ばれ、日本の塗箸の80%以上の生産量を占めている。小浜市の若狭塗り箸のメーカー「株式会社イシダ」（以下、イシダ）と同市内の就労継続支援Ｂ型事業所、株式会社縁（以下、縁）が製造工程で連携している。イシダは高級箸、土産・贈答品用の箸を扱う市内でも規模の大きな老舗企業。箸の製造工程は木地づくりから塗り、研ぎ出しまで多岐に渡り、その一部を縁が担っている。若狭塗箸という伝統工芸品の生産に関わる福祉事業所は多いが、縁は「内職」にとどまらず「製造」に関わっている希少な事業所である。



【連携のきっかけ】

イシダとの連携は縁が事業を始めた2013年から行っている。もともと箱の製造に携わっていたが、売上が落ち込む時期に近隣のメーカーであるイシダの箸を内職する機会があり、今に至る。縁の事業所は2階建ての民家で乾燥室の機材を設置できる広さがあることなどから、製造工程に関わるようになった。クオリティが問われる工程で職員を中心とするスタッフたちの積極的な技術力の向上が事業の継続につながっている。

【連携の特徴】

- 若狭塗箸の「内職」に関わっている事業所は多いが、 縁は「製造」過程を担うほぼ唯一の福祉事業所である。「内職」とは箸の袋詰めなど製品の完成後に発生する作業を指し、「製造」は箸の製品化の過程で発生する作業を指す。
- 箸のつくり手は手作業主体の職人事業者も多い中、イシダは複数の工場を持つ小浜市内の有数の大規模メーカーである。
- 両業者は円滑な連携事業のために現場見学の機会を持つなど、信頼関係の構築に努めている。

【連携の成果】

- 福祉事業所は若狭塗箸の生産に関わる内職だけでなく製造加工にも関われるのだという理解が地域の企業等に広がった。
- 施設外就労のほうが高い工賃を出せる中、屋内の静かな場所で安定した生産活動を行ない高工賃を実現している。
- 地域産業にプレイヤーとして関わっていることが利用者の自信につながっている

活躍できる作業例

作業名	作業内容	向いている人
沈金	レーザーで彫られた模様に金などの塗料を塗り込み、吹き上げて模様を浮かび上がらせる	持続性のある人
糸巻き	塗料に糸を沈めて、糸の上で箸を転がす	技術習得のための理解力がある人、手先の器用な人、状態の把握ができる人、作業について積極的にコミュニケーションがとれる人
平巻き	スポンジの上に塗料を塗って、模様の境目を消す	

【ここが違う！縁の取組み】
内職ではなく、重要な製造工程の一部を請け負う

① 縁ではできあがった箸を封入するなどの内職的な受注ではなく、磨く・塗るなどの製造工程の一部を業務委託で受注している。
② 箸の製造工程は成形する「木地づくり」から、模様や重ね塗りを行う「塗り・研ぎ出し」を経て完成するまで20近い工程をたどる。縁はその中の最終工程の数段階に携わっている。様々な作業で構成されているため、仕事を切り出しやすく、できる作業をできる人に割り振りしやすいのが特徴。
③ 乾燥設備を事業所内に設置することで完成品を傷つけることなくイシダに納入できる。製造工程の一部を担う〝工場"として位置付けと役割意識を持っている。
④ 製造過程に関わる唯一の事業所という自負もあり、クオリティ向上のために改善を積み重ねているため技術力が高い。企業へ改善面の提案も行っている。
⑤ イシダへ納入した製品を縁がつくった製品として卸してもらい、福祉事業所が集まるイベントなどで販売している。

磨き上げる作業

糸巻きの作業

これから取り組む事業所に
WIN－WINのポイント

株式会社イシダ
代表取締役社長　石田茂樹氏

品質には妥協せず、正確な納入を依頼できる外注先

障害者が働く福祉事業所だからという理由で品質に妥協することはありません。できるだけ正確に納品してもらうよう依頼しています。一方で障害者就労支援に関わっていることで社会的貢献ができたらと思っています。この連携では当社としてもまとまった数を発注できる外注先ができてありがたいです。

株式会社縁
縁（ゆかり）
代表取締役　北山政道氏

品質向上のために工夫や改善は必須です

製造の一部を担っている唯一の福祉事業所としてこの事業には力を入れています。福祉事業所という理由で品質が劣っていると言われたくないので、現場では品質を上げるため利用者の特性に合わせた治具や作業方法を（株）イシダの担当者と打合せを行い対応頂くことで生産効率の向上にも努めています。

縁（ゆかり）のホームページへ
美しい若狭箸についてご覧いただけます。

法人名 事業所名	株式会社縁 縁(ゆかり)
住所	福井県小浜市東市場38-17
TEL	0770-56-3066
URL	https://yukari-obama.hp.peraichi.com/

伝統工芸×福祉

島根県
浜田市

神楽という伝統を継承する団体

神楽社中

就労継続支援Ａ型・Ｂ型事業所(多機能型)

ワークくわの木金城第２事業所

神楽舞いの公演の様子

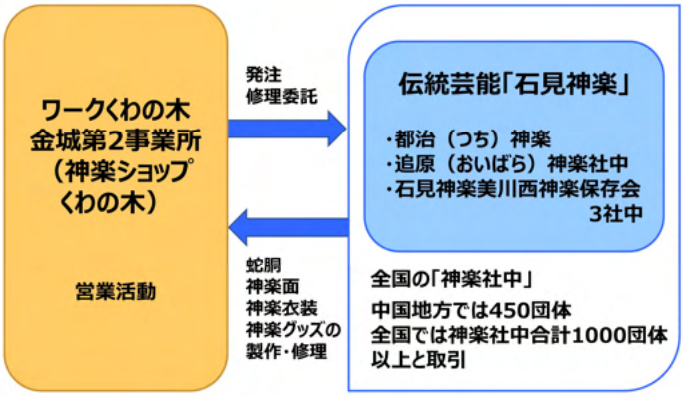
仕立て

竜　金糸掛け

連携の概要

「石見地方の伝統芸能「神楽」の衣装、蛇胴、面の製作販売」

島根県の石見地方は古くから「神楽の里」とも言われ、「石見神楽」という伝統芸能が継承されてきた地域である。「ワークくわの木金城第２事業所」は障害者の職業訓練や職業自立の一環として、石見神楽の衣装や蛇胴、神楽面などの製作や修理を行っている。連携先は販路として全国の神楽社中が対象となる。数にすると中国地方450、全国1000以上の団体と取引を行っている。また、同事業所では神楽衣装・蛇胴・お面の製作にとどまらず、石見地方の伝統産業である和紙生産も行っている。店舗機能を併せ持つ神楽ショップくわの木では神楽を舞う事に必要な道具等も幅広く取り扱っている。



【連携のきっかけ】

1974年神楽産業にはじめて挑戦した。当初は屋台やお土産物屋で売るおもちゃの面である玩具面制作からスタートした。その後、蛇胴や神楽衣装へと製作に挑戦していった。伝統産業に携わる業者間ではモノづくりの技術を互いに教え合うことは皆無。本格的に神楽産業に挑戦した蛇胴制作では商品として地域から信頼を得るのに10年以上の歳月を要したが次第に評価していただける蛇胴が製作できるようになった。現在は島根県・広島県を中心に全国の神楽団から注文が入るようになり、年間50-60本の蛇胴をはじめとする神楽衣装・神楽道具の製作販売を行っている。

【連携の特徴】

- 石見神楽は地元で愛されている伝統芸能であり、長い歴史の積み上げがある。地域全体で事業を守るという雰囲気がある。
- 県内の福祉事業所では同業がなく、同事業所は石見神楽商品の製作販売を事業として行う貴重な存在である。
- 事業所の職員数名が連携先（地元の神楽社中）のメンバーでもあり、事業に顧客の視点を活かすことができる。

【連携の成果】

- 事業継続の中で作業改善に取り組んでいる。そのひとつに工程を分散させて多人数で対応することで生産性を向上させて納期短縮を図った。
- 技術力の向上はもとより神楽ショップくわの木という商談の場を設けてきめの細かい商談を行い適性価格の設定に努めている。
- 当初は神楽団の練習場を訪問して直接営業をしていたが、実績を積み、現在はホームページを通じて全国に宣伝できている。

活躍できる作業例

作業名	作業内容	向いている人
綿糸への蝋引き	綿糸に蝋を塗り付ける	単純作業を黙々とこなせる人
生き物綿詰め	下絵に沿って綿を用いて竜や虎を成形する	手先が器用な人・黙々と作業をこなせる人・立体的な凹凸を表現する感性がある人
生き物仕上げ	金糸掛けした竜や虎にガラスを用いて目玉を入れたり眉毛・キバを取り付ける	丁寧に作業ができる人・目玉や眉毛を表現する感性がある
平縫い刺繍	デザインされた図柄に沿って金糸・銀糸で刺繍する	丁寧に作業できる人・手先が器用な人・黙々と作業をこなせる人
仕立て・縫製	刺繍が全て完了すると専用の糊で糸止めを施し、乾燥後台から取り外した生地を縫製する	縫製の知識を持っている人

【ここが違う！ワークくわの木金城第２事業所の取組み】
納期の短縮と適正価格の設定。顧客ニーズをしっかり把握

① 利用者が携わる作業工程では難易度の高いものとそうでないものを分け、利用者の特性や技術の熟練度よって人を配置した。地域からはパート従業員や家庭内職を雇用し共働・協働を実現することで納期短縮をはかった。以前は納期まで２～３年かかることもあったが、現在は1年に短縮できている。
② 価格がわかりにくい商品だが、他店との価格差をリサーチするなど適正価格を分析し、事業所と顧客の両者が納得のいく金額設定を行っている。
③ 一般的に神楽社中の予算内で作り手が自由に作るところを、同事業所では神楽ショップという商談の場を設けて顧客のニーズを引き出し、ニーズに合うものをつくっている。この点が成功のポイントとなっている。
④ 同法人には石見神楽を演じる「いわみ福祉会芸能クラブ」があり、海外公演も行っている。舞い手がいるから成り立つ神楽産業で、全国の神楽の普及の位置役を担っている。

平縫い刺繍

竜　仕上げ

これから取り組む事業所に
WIN－WINのポイント

都治神楽社中 桑原史寿氏
追原神楽社中 高原真氏
石見神楽美川西神楽保存会 後藤純希氏

生産力、対応、利便性などよいところがたくさんです（写真左から桑原氏・高原氏・後藤氏）

神楽衣装を扱う店は家内工業的なところが多いのですが、福祉事業所と連携することで生産スピードが向上したと思います。新設の社中の注文にも親切に対応してくださいます。神楽ショップは道具一式が何でも揃う利便性の高いお店です。

社会福祉法人いわみ福祉会
ワークくわの木金城第2事業所
係長 佐々木満氏

伝統を守りながら新しさも取り入れていきたいです

当事業所の商品が全国に知られるようになるまでかなり時間がかかりましたが、これからも積極的に情報発信をして、できるだけ多くの人に石見神楽のことを知っていただきたいと思います。伝統を守る一方で、衣装では若者向きのデザインを考案するなど、時代に合わせた表現もしていきたいですね。

作業の様子を写した動画を公開中！
利用者が実際に作業している様子をご覧いただけます。

法人名 事業所名	社会福祉法人いわみ福祉会 ワークくわの木金城第２事業所
住所	島根県浜田市金城町下来原1541-８
ＴＥＬ	0855-42-0039
ＵＲＬ	http://www.iwamifukushikai.or.jp/kanagi2.html

伝統工芸×福祉

広島県
三原市

150年以上の歴史をつなぐ伝統工芸

三原だるま保存育成会

就労移行支援・就労継続支援Ｂ型事業所

株式会社WISH

和紙をつくる作業　ミキサーで撹拌する（中国新聞撮影）

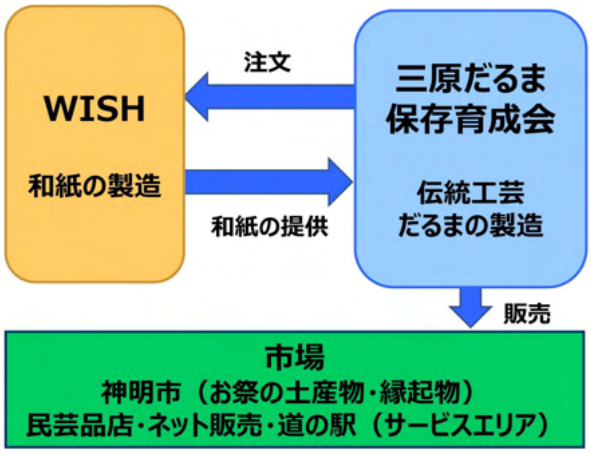
手作業が中心

三原だるま

連携の概要

「和紙生産で地域の伝統工芸品“三原だるま”の伝承に貢献」

三原だるまは150年以上前から伝わる広島県三原市の伝統工芸品。特殊な和紙で形を作り、すべて手作りで色塗りや面相描きを行っている。その三原だるまの和紙を「株式会社WISH」がつくり、「三原だるま保存育成会」に提供している。三原だるまの製作に携わる職人は高齢化のため年々減少し、今では同保存育成会のごくわずかな人数が製作に携わっている。また、これまで和紙を製作していた職人も高齢のため生産が途切れるところを、WISHが引き継ぐことになった。地域の伝統工芸を守る連携事業となっている。



【連携のきっかけ】

三原だるまの形を作る際に使われる和紙の製造を行っていたのは、埼玉県の和紙の里の1箇所のみ。そこでの生産が途切れることを機に、三原市の観光協会を通じてWISHに話が入った。和紙でハガキ等をつくる福祉事業所は他にもあるものの、三原だるまで使う和紙は大きさや作り方が独特なため請け負う事業所がなく、WISHが着手。代表の山田氏が和紙の里から作り方を習い、独自の過程を考案した。現在で8年間継続している。

【連携の特徴】

- 三原だるまは約150年以上の歴史を持つ伝統工芸品だが、現在は作り手が少なく、三原だるま保存育成会のみが作っている。
- 販路は三原市で毎年2月に行なわれる「神明市」。約500もの露店と人で賑わう地元の祭りで、だるまを買うのが地域の風習となっている。
- WISHが生産を引き継ぐにあたって、和紙の製造工程を簡略化・独自化した。特殊な設備は不要なのが特徴。

【連携の成果】

- 職人の高齢化で途切れそうになった和紙の生産をWISHが引き継いだことにより、三原市の伝統工芸の歴史をつなぐことができた。
- 地域の特産品に携わる仕事を請け負い、実際に売られているだるまを見ることで、事業所の利用者が仕事にやりがいを感じている。
- WISHが独自に考案した和紙製造のプロセスは三原だるまの成形にとどまらない用途として広がる可能性がある。

活躍できる作業例

作業名	作業内容	向いている人
枚数数え	新聞紙、コットンの枚数を分ける	確実に枚数を数えられる人
切る	新聞紙、コットンを切る	一定の大きさで切れる人
撹拌	ちぎった新聞紙と和紙の切れ端を水を入れたミキサーで撹拌する	量が的確に測れる人 座って作業が出来る人
厚み調節	木枠に流し入れ、水を抜き、厚さを手で均等に広げていく	均等な感覚が分かる人
乾燥	天日干しにする	丁寧に作業が出来る人

【ここが違う！WISHの取組み】

簡単に入手可能な原材料を使い、製造工程を考案

① 三原だるまの形を作る際に貼り合わせていく和紙（張子紙）をつくっている。その張子紙から三原だるまが作られる。
② 埼玉県和紙の里から製造方法を伝授され、WISHでは本来の工程を簡略化した工程を考えた。原料は新聞紙とコットンのみ。新聞紙を手作業でちぎり、和紙独特の長い繊維質は木の皮の代用品としてコットンを使用している。それらをミキサーで撹拌し、手製の木枠に流し込み、漉き作業には市販の網戸を使い、ベニヤ板で押圧する。市販の原料と設備で製造が可能である。そのうえで三原だるまの品質を確保している。
③ WISHでは現在三原だるまの制作のための和紙生産にとどまっているが、今後は他の人形の下地として使うなど他の用途で利用できる可能性もある。

木枠に流しいれる

ベニヤ板で押える

これから取り組む事業所に
WIN－WINのポイント

三原だるま保存育成会
代表 鳥生悦郎氏

コロナで神明市が中止
少しずつでも作り続けます

WISHさんで創っていただいた和紙はだるまの本体に使っています。枚数を注文し、納期をお願いしています。品質についてはこちらが提案する課題を前向きに取り組んでくれます。コロナの影響で神明市が2年連続で中止になりました。売れ行きはずいぶん減りましたが、少しでもつくっています。

株式会社WISH
WISH
代表 山田賢治氏

今後は生産量を
増やしていきたいです

地域の歴史ある伝統工芸に関われる仕事ということが皆のモチベーションになっています。今は事業所の小さな屋外スペースを使ってつくっているため生産量が限られていますが、設備を整えて生産量を増やしていきたいですね。そしていずれはだるまをつくっていけたらいいなという思いもあります。

事業所ホームページへのご案内です。
事業所の活動を俯瞰的にご覧いただけます。

法人名 事業所名	株式会社WISH WISH
住所	広島県三原市城町1-15-1旭ビル201
ＴＥＬ	0848-38-9555
ＵＲＬ	http://wish20131101.mond.jp/

伝統工芸×福祉

岩手県
盛岡市
一関市

創業100年　染め・デザイン・加工
自主一貫の染物店
株式会社京屋染物店

就労継続支援Ｂ型
幸呼来（さっこら）Japan

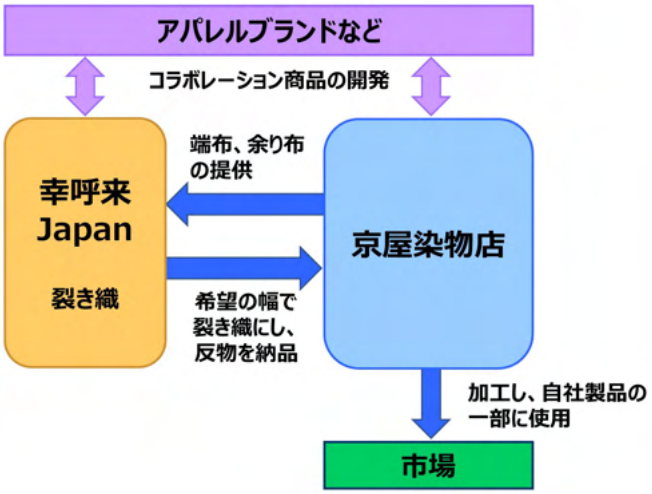
京屋染物店から預かった端布、余り布を裂き織として再生
タグとして商品の一部に

アウトドアブランドSnow Peakとのコラボ商品

連携の概要

「老舗染物屋が自社製品の端布・余り布から作られた裂き織を使って土地の香りのするオリジナル商品を開発」

東北地方の伝統技術である裂き織を事業化した幸呼来Japan。地元メディアや催事販売で優れた商品に注目していた京屋染物店の社長から声がかかり、連携がスタートした。裂き織は、古くなった布や浴衣を細く裂き、織物の横糸として織り込むことで新しい布に生まれ変わらせるという、日本伝統の“アップサイクル“技術。手染めにこだわる京屋染物店の製品は端切れ、余り布も貴重な存在。これを預かり、裂き織の反物にして納品するのが基本の連携スタイルとなった。京屋染物店では、裂き織となって戻ってきた布を商品のモチーフとして使用する。サステナブルなモノづくりが注目を集め、京屋染物店を通して大手アパレルとのさらなるコラボレーションも生まれている。



【連携のきっかけ】

幸呼来Japan代表の石頭氏が裂き織で事業所を立ち上げたきっかけは、特別支援学校の授業で行われていた裂き織づくりを見学したことだった。こんなすごい技術を埋もれさせるのはもったいないと、社内ベンチャーを立ち上げ、軌道に乗りかけたまさにその時、震災に遭い、独立を決意し、福祉事業所を立ち上げた。復興を応援してくれた多くの企業との出会いを通じてさまざまな経験をする中で、品質管理や企業との取引について学び、経営力を磨いてきた。一方、京屋染物店社長の蜂谷氏は、伝統を守りつつ挑戦する経営スタイルで地域活性をけん引する存在。地元の企業の共存共栄で地域を盛り立てていこうと常にアンテナを張っている中、両者を結びつける出会いがあり、連携が始まった。

【連携の特徴】

- 京屋染物店と幸呼来の連携は伝統工芸×伝統工芸、かつ、時流にあったアップサイクル型商品であり、ストーリー性が高い。循環型モデルを模索しているアパレル業界の中でも注目度の高い取組みとなっている。
- 京屋染物店の藍染は、数種の幅の横糸に加工した上で反物として納品する。素材として提供することで、活用の仕方は企業次第であり、商品展開の可能性が広がる。

【連携の成果】

- 京屋染物店では、商品のタグ、ポケットのデザインなど裂き織を使った定番商品を製造・販売しており、継続的な連携が実現している。
- 京屋染物店を通じ、Snow Peak社とのコラボレーションで「LOCAL WEAR IWATE」が生まれた。
- 「企業の残反を預かり、裂き織の技術を使って新しい生地に再生し、企業に新たな価値を持つ素材を提供する」という取り組みが評価され、幸呼来Japanは2018年にグッドデザイン賞を受賞した。

活躍できる作業例

作業名	作業内容	向いている人
布ほどき	浴衣、端切れなどの縫い目をほどき布にする	手先の器用な人
染色	決まった時間、糸や布を染料に浸水し、染める	体力のある人 集中力のある人
布裂き	布を、一定幅にはさみで切りこみを入れ、思い切り引っ張って、裂く 裁断機を使って、一定幅の布になるよう慎重に切る	手先の器用な人 集中し、正確に作業ができる人
糸巻	織機にセットするたて糸を糸巻機を使って巻き上げる	正確に作業ができる人 注意力のある人
織り	織機を使ってたて糸、横糸を組み合わせ織っていく	正確に作業ができる人 集中力のある人

【ここが違う！幸呼来の取組み】

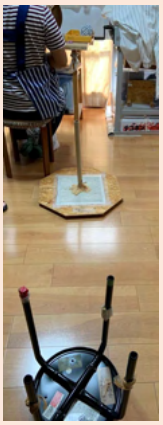
安定品質・量産・素材提供・・サステナブルな伝統工芸事業モデルを構築したことで、企業が組みたいパートナーになっている

① 企業とコラボレーションできる裂き織の秘密は、幅とカラーを規格化した横糸にある。端布、余り布を適当に裂いてそのまま織り込む、単なる裂き織ではない。そのための工程として、染色（残反の染め直し）や機械裁断（ペーパーカッターを使用）があるが、高い技術が求められる。

② 作業ごとに求められる適性が異なり、織りの作業もよこの糸や織幅によって難易度が異なる。そのため、適材適所でいかに得意な分野で力を発揮してもらうか、作業マッチングと技術力向上の支援が重要である。

③ 生産の効率化には現場の工夫も欠かせない。裂いた布の糸巻には丸椅子と手作りの糸巻台を組み合わせて活用している。

④ 企業とのコラボレーションの際には、素材提供の場合でも、必ずダブルネームをお願いしている。受注額についても時間当たりの単価を計算し、採算がとれる価格での提案を行っている。



長い残反を裂き、巻くために手作りの道具を活用

幅の揃った裂き布

これから取り組む事業所に
WIN－WINのポイント

株式会社京屋染物店
代表取締役 蜂谷悠介氏

良い工房さんだからコラボするというスタンスです

幸呼来Japanさんに対して、福祉施設だから一緒に仕事をしようという意識は特にありません。障害のある人が作っているから心配ということは全くなくて、その組織のリーダーが信頼できる人であれば、協力しあって、お互い良い経営ができればいいし、地元を元気にしたいと思うだけです。自社の使命は和の文化を作ること。世界を相手に仕事を創っていきたいと思っています。幸呼来さんとともに商品価値を高める取り組みをしていきたいですね。

幸呼来Japan
代表取締役 石頭悦氏

京屋染物店さんとともに商品を世界に発信していきたい

地域産業連携と聞いて、京屋染物店さんとご縁をいただいていることがまず頭に浮かびました。東北の文化である裂き織を、地元の染物店さんとともに、持続性のある事業として育てていきたいと思います。時間のかかる手仕事の価値、布を捨てず再利用することの価値をブランディングすることにも力を入れています。利用者の仕事としては、根気のいる難しい作業が多いので、厳しい側面もありますが、難しいからこそやりがいも誇りも持てる仕事です。

作業の様子を写した動画を公開中！
利用者が実際に作業している様子をご覧いただけます。

法人名 事業所名	株式会社幸呼来Japan 幸呼来Japan
住所	岩手県盛岡市安倍館町19-41
ＴＥＬ	019-681-9166
ＵＲＬ	https://saccora-japan.com/

地域活性×福祉

愛知県
名古屋市

サ高住を含む480戸の公営住宅

大曽根住宅自治会

就労継続支援A型事業所

ソーネおおぞね

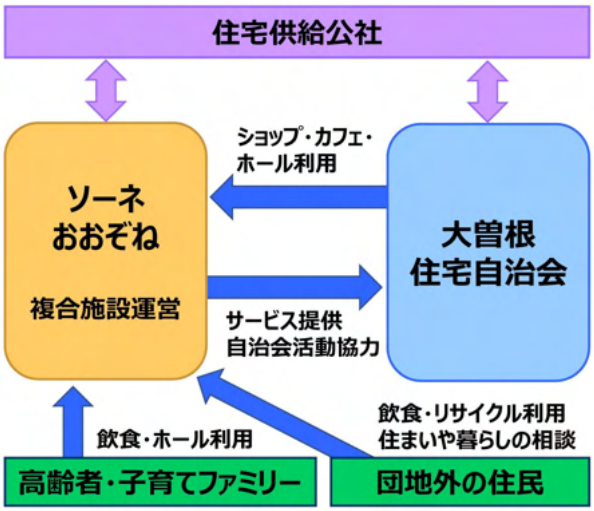
スーパー撤退後、ひっそりと静まりかえった団地１F商業スペースに活気が戻った

多世代の顧客が利用するカフェ・レストラン

連携の概要

「1000㎡の空間に作ったコミュニティ拠点が、法人理念を実現する新しい職場に」

ソーネおおぞねは、カフェ、有機野菜やパンのショップ、ホール、相談スペースを備えた複合施設である。隣には資源買取りセンターを設置している。公営団地の1階に作られた当事業所は、住民同士の交流を促し、また周辺からも人を呼ぶ地域総合交流拠点となっている。住宅供給公社が団地の一部を使ってサ高住（サービス付き高齢者向け住宅）を開設することになった際、長らく空き店舗となっていた場所に住民向けの店舗を出してもらえないかと声がかかったことがきっかけである。地域住民の代表である自治会とは、設立前から対話を重ね、コンセプトづくりに活かした。コロナ禍で当初の計画通りに進んでいないこともあるが、自主企画のイベントの他、自治会の夏祭りなどにも全面的協力し、地域を盛り上げることで周辺からの集客も促進されている。



【連携のきっかけ】

サ高住の運営会社から声がかかったのが、大曽根住宅に出店するきっかけだった。以前から住む旧住民、サ高住に住む新住民とも高齢者が大半であり、住民の暮らしや健康を支えることを目指し、飲食や物販の店を計画した。店のメイン顧客でもあり、支援対象でもある住民の代表として、自治会との活動を理解し、協力すること、要望を聞き、事業運営に活かすことは、経営上連欠かせない要素である。

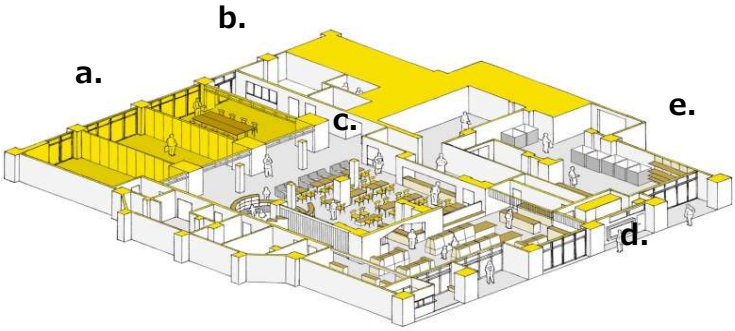
【連携の特徴】

- 住民の食事を支えるために、カフェは朝、昼、夜の3食の需要に対応している。
- 子どもの遊び場、家族向けの座敷席を設置するなど、周辺地域からの集客を意識した店づくりを行っている。ホール利用を含め近隣客の評判も良い。集客に成功することで、住民との自然な交流が生まれている
- 自店のイベントを頻繁に実施する他、自治会のお祭りにも積極的に協力し、賑わいを創出している

【連携の成果】

- コロナの影響を受け、カフェの回転率、ホールの稼働率など厳しい状況にあったが、広く地域に認知されていることで、客数は回復傾向にある。リピーターが多く、地域住民交流の中心的な場所になっている。
- 地域に根ざして活動を続けてきた就労支援事業所が、その経験を生かし、空き店舗をダイナミックに利用した店舗を作ることで、住民の利便性向上に寄与している。

施設概要



a. ソーネホール：イベントスペース
b. ソーネそうだん：地域サービス相談コーナー
c. ソーネカフェ：カフェ・レストラン
d. ソーネショップ：ショップ（パンなど）
e. ソーネしげん：しげん買い取りセンター

【ここが違う！ソーネおおぞねの取組み】
コミュニティ拠点に出店するのではなく、事業所自らコミュニティの核となるという発想

① 1000㎡のスーパー跡地利用。天井が高く、広々した空間で、お客様は他の人の存在を認識しながらもストレスを感じることなく食事を楽しむことができる。
② 民営のホールでさまざまな催しを行うことができる。大衆演劇は固定客がつく人気で、住民の楽しみになっている。ワクチン接種に関するセミナー、フェアトレードについての講座など多様なテーマの研修も行われている。自治会や地域団体の会議利用も気軽に使えて便利と好評である。
③ 長年、事業所を運営してきた当法人のノウハウを活かし、イベントを頻繁に実施している。ヤギを連れてきたイベントは、子どもたちにも大人気。自治会長も驚く賑わい演出で、団地が明るくなった。
④ 地域住民が誰でもなんでも相談できるスペースを設けたことも、地域への貢献の一つである。高齢者の相談のほか、生活困窮者等の居住支援、子育ての相談など福祉の各専門領域につなぐ役割も担えるのは、当法人が培ってきた支援の一つである。

勤務しているスタッフの皆さん

ダイニングカフェ

これから取り組む事業所に
WIN－WINのポイント

大曽根住宅自治会
会長　戸塚淳詞氏

賑わいを作ってくれる存在。お互い言いたいことを言い合える関係を作りたい

天井が高くて広々したカフェは居心地が良くていいね。奥のホールも気軽に借りることができて助かっている。住民が高齢になって、旧住民とサ高住の住民が交流することはあまりないけれど、ソーネおおぞねが秋祭りや餅つきのイベントをやったり、自治会のお祭りもテントを増やして共同でやるようになって、賑わいを作ってくれるのはありがたい。これからもっとお互いに良い関係をつくれたらいいなと思っています。

特定非営利活動法人わっぱの会
ソーネおおぞね
理事長　齋藤縣三氏

共に働き・共に生きる社会を体現する場として

当法人の活動を始めて50年になります。共に働き、共に生きる社会をつくることを目指し、さまざまな事業を行ってきたことが、地域住民の暮らしに直結する事業として結実したのが、ソーネおおぞねです。コロナの影響は受けつつも着実に地域に浸透してきました。ここを拠点に仕事の充実を図るとともに、さらに暮らし良い街づくりに貢献できればと思います。

事業所ホームページへのご案内です。
事業所の活動を俯瞰的にご覧いただけます。

法人名 事業所名	特定非営利活動法人わっぱの会 ソーネおおぞね
住所	愛知県名古屋市北区山田2-11-62 大曽根住宅1棟1階
ＴＥＬ	052-910-1001
ＵＲＬ	https://sone-ozone.com/

地域活性（観光振興）×福祉

宮崎県
高千穂町

宮崎の名所、高千穂の観光振興を支える
一般社団法人
高千穂町観光協会

就労継続支援A型・B型事業所（多機能）
にじいろ

製造・販売拠点のそらいろ

メインストリートのにじいろカフェ

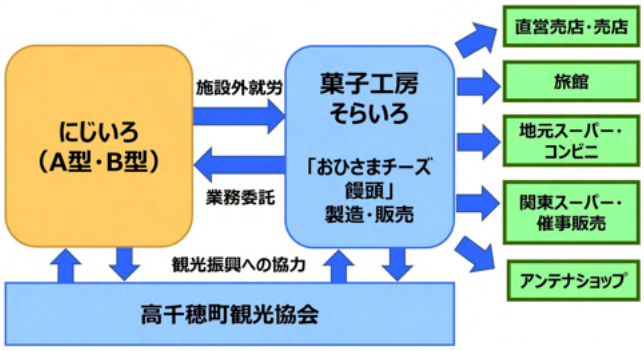
チーズ
まんじゅう

製造作業風景

連携の概要

「高千穂土産といえば“おひさまチーズ饅頭”その製造を支える“にじいろ”の利用者」

菓子工房そらいろの「おひさまチーズ饅頭」は高千穂観光土産として人気の定番商品である。高千穂峡は有数の観光地だが、お土産品が少なく、地元での消費行動が少ないことが地域課題となっていた。ここに目をつけた田尻氏とその母親が、勤めていた非営利活動法人で生産活動のひとつとして開発したのが始まりである。地元の評判もよく、さらに事業を拡大できると考えた田尻親子はその後独立して、法人を設立。観光土産としてのポジションを確立する上では高千穂町観光協会との連携が欠かせなく、観光協会の直営売店への納入を開始してもらったほか、諸々のアドバイスをもらうなど、地元での販路確保に協力をしてもらった。営業努力が実を結び、現在、商品は地元の道の駅、スーパー、コンビニエンスストア等で販売している。



【連携のきっかけ】

平成27年に田尻氏が観光協会会員として加わったことが最初の出会い。半年ごとに発行する機関誌でにじいろの活動を紹介したり、高千穂峡近くの直営売場でのチーズ饅頭の販売を開始したことから連携が始まった。その後、理事の発案ではじまった「販売支援事業」のメンバー（全６名）として自発的に加わり、積極的に発言されるなど町の観光事業の推進にも深く関わっている。

【連携の特徴】

- 菓子工房そらいろは、利用者の施設外就労先とすることを前提として作られた。
- 観光土産が少ないという地域課題に目をつけ、ターゲット・コンセプトの明確な商品を開発した。従来からあるチーズ饅頭を研究した上で特徴を打ち出した。
- 福祉事業所として企業と関わるというより、菓子工房そらいろ、にじいろが一体となって、地元の商工業者の一員として、観光振興に貢献している。

【連携の成果】

- 町内唯一の就労継続支援Ａ型事業所として、利用者に10万円以上の賃金を支給すると同時に、成果の見える、やりがいのある仕事を提供している。
- 商品は高千穂町を代表する土産品となり、県外販売や通販でも成果をあげている。
- チーズ饅頭の製造・販売という基幹事業を通じて地域企業等の信頼が得られ、Ｂ型利用者の受注作業の種類・量も年々拡大している。

活躍できる作業例

作業名	作業内容	向いている人
生地を切る	工程はすべて手作業でおこなっている	集中力・持続性・正確性がある人
餡となるチーズの分轄	小さめのディッシャーを使うことで、10㌔のチーズの塊から饅頭１個分のチーズを形よく分ける	集中力・巧微性・体力がある人

＊細分化された作業、一つ一つの作業工程において、職人でなければできないような難しい作業はない。生産性を考え、得意なところで活躍してもらう。
＊他にＨＰ制作、カフェでの接客など個々の利用者のニーズや適性に合わせた仕事を提供している。

【ここが違う！にじいろの取組み】
地域ニーズを発見し、商品開発力・障害者の生産力をマッチさせて生まれた逸品

① 観光名所でありながら土産物が少ないことに着目し、チーズ饅頭を開発。就労継続支援事業所を立ち上げる前に法人として製造・販売体制を整えてから利用者を迎えることとして、会社設立の3年後にNPO法人を立ち上げた。
② 宮崎県内ですでにチーズ饅頭は土産物の定番ではあった。商品開発は、既存の商品を十分に研究した田尻氏の母親が、独自のレシピを開発。栄養士の資格も持っていることから、衛生管理・品質管理も万全であり、販路の拡大でも問題なく対応できた。
③ 福祉を前面に出さず、商品力と積極的な営業活動でＡ型の事業を軌道に乗せている。利用者にとっても、自分の作ったものが、地元のあちこちの店で販売されていることや、全国の催事で販売されることに誇りとやりがいをもって取組めている。
④ 地域との緊密な関係は商品のバリエーションにも表れている。釜炒り茶という地元の製法で作られたお茶を使ったチーズ饅頭や、季節の果物のフレーバーをとり入れたチーズ饅頭は、結婚式の引き出物の注文をいただいた際に、お客様の要望から生まれた商品。

一つ一つ手作りで製造

種類も豊富に

これから取り組む事業所に
WIN－WINのポイント

一般社団法人高千穂町観光協会
地域振興課統括主任　丹波由香氏

高千穂町観光業の振興を担う大切な存在です

田尻さんは、高千穂町へ移住される前には他業界での勤務をされていたので、幅広い知識を持たれてます。そのような背景から、新しい発想による意見が多く、私たち周辺への刺激となっています。
将来に向けて、この町での基幹産業である観光業の振興には欠かすことのできない大切な存在です。

特定非営利活動法人彩りにじいろ
理事長　田尻哲朗氏

商品を全国・海外に広めることが高千穂のPRにもなると思います

自分たちの作った商品が関東のスーパーや宮崎県の物産館で売られることが、利用者のやりがいや誇りにつながります。さらに全国・海外に展開していきます。商品を通じて高千穂観光の振興にも貢献したいと考えています。また、事業規模を拡大し、より多くの利用者の働く場としたい。自立することが望ましい方がたくさんいるように思うので、グループホームを作りたいと考えている。住まいがあれば、他の地域から転居して働くこともできます。

作業の様子を写した動画を公開中！
利用者が実際に作業している様子をご覧いただけます。

法人名 事業所名	特定非営利活動法人彩り にじいろ
住所	宮崎県西臼杵郡高千穂町三田井１１７１-7
ＴＥＬ	0982-83-0707
ＵＲＬ	https://nijiiro8.wixsite.com/website

地域活性×福祉

愛媛県
松前町

「印刷テクノロジー」をベースに
幅広い事業活動を展開
凸版印刷株式会社

就労継続支援B型事業所
インクルーシヴ・松山
ヒカリのアトリエ

利用者の作品

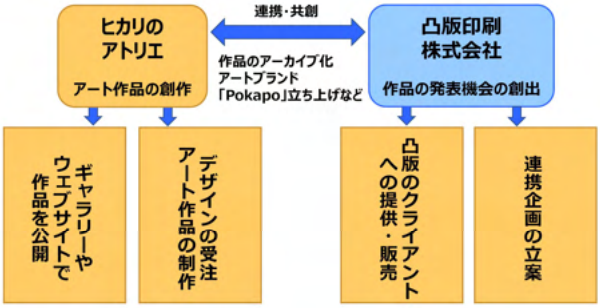
gallery inclusive

Pokapoのエコバック

連携の概要

「個性豊かなアート作品をアーカイブ化し、多くの人の目に触れる作品発表の機会を創出」

60人の障がい者アーティストから日々生み出される年間500点にものぼるアート作品を、凸版印刷株式会社（以下、凸版印刷）のリアルスキャン技術を使いアーカイブ化している。WEB上で、美術館のようなバーチャル空間を作り出し、世界中の人々に閲覧が可能となった。アート作品は企業の商品パッケージやプロモーションイベントのコンテンツやツールのデザインとして活用いただけるように販売スキームを構築している。2021年4月にはカフェとアートを融合させた会員制サロン「ART CAFÉ Inclusive supported by NESCAFÉ」を松山市にオープン。共同プロジェクト第二弾として、アートブランド「Pokapo」を立ち上げ、持つだけで支援になる！障がい者アーティスト応援「エコバック」を製作、同年10月18日より「Makuake」にて作品の露出機会を創出、販売を開始した。



【連携のきっかけ】

ヒカリのアトリエがホームページのリニューアルを相談したことが出会いのきっかけである。当事業所のビジョンに凸版印刷が共感し、同社の持つ「リアルスキャンの技術」を用いた共同プロジェクトをスタートする運びとなった。凸版印刷の社員が何度も事業所に足を運び、技術提供のみならず、PRやプロモーションについても議論を繰り返し行い、様々な可能性が生まれた。

【連携の特徴】

- 凸版印刷の担当者から役員に至るまで、ヒカリのアトリエの理念、方針、ビジョン、取り組み内容を深いところまで理解し、共感している。
- 「納期ファースト」ではなく、「利用者ファースト」を第一に、一人ひとりの個性や状況に応じた対応や連携を実践している。
- 繊細に表現された障がい者アート作品と作品の質感を維持したままデジタル化できる「リアルスキャン」との相性が良くアーカイブ化に適している。

【連携の成果】

- 凸版印刷の取引企業に対しアート作品を提供し、PRやプロモーション用のアート素材として活用いただける機会が増加。
- 愛媛県の広報誌やメディアでの露出、美術館での展示、海外自動車のディーラーのギャラリーに展示されるなど発表の機会の増加につながっている。
- ノベルティグッズやパッケージ化など社会とつながりを持つことで、工賃や自己肯定感の高まりなどの好循環が広がりつつある。

創作風景

創作風景

【ここが違う！ヒカリのアトリエの取組み】

企業の最先端技術で障がい者アートの認知度向上と商用利用拡大を目指す

① 高い志のもと社会的課題に取り組んでいる事業所の姿勢に共感した凸版印刷が磁石のように引き寄せられ、ヒカリのアトリエの目的である作品発表の機会が次々と創出されている。
② 創作活動に関わる利用者への指導は行わず、それぞれが日々描きたいものを描けるよう材料と環境を提供するだけに留めるよう心掛けている。
③ 凸版印刷のアーカイブ技術を利用し、完成した作品が、ウェブサイトで販売できる他、凸版印刷の取引先にも紹介され、デザイン素材として販売できる環境がつくられている。これにより、利用者の工賃アップにつながった。
④ 凸版印刷から提案される企画を通じて更に多くの人の目に触れる機会を継続的に増やしつつある。
⑤ 利用者の中には、描く作品のテイストが明るい色合いの絵に変わり、本来持っていたアーティストとしての才能が開花する利用者も増えてきている。

アメリカンフラワー制作風景

アトリエ内部

これから取り組む事業所に WIN－WINのポイント

凸版印刷株式会社 西日本事業本部
関西事業部 関西TIC本部
コミュニケーションデザイン部
部長　谷口剛氏

SDGsやダイバーシティといった社会的潮流からも障がい者アートが見直される良い機会

多様性が求められる社会の中で障がい者をどうフォローできるか？近視眼的ではなく本質と向き合われている素晴らしい事業所です。また営利企業である限り綺麗事だけでは続かないため、支援だけでなく価値を生み出すビジネスパートナーとして三方良しの循環モデルを構築することが大切だと考えています。最後に人を動かすのは当事者の熱量であり、青山様はじめ取り組む姿勢から学ばせていただくことが多々あります。

（右：青山氏）

特定非営利活動法人
インクルーシヴ・ジャパン
インクルーシヴ・松山 ヒカリのアトリエ
青山俊子氏

安い労働力という印象を払拭し才能を活かせる仕事に就いてほしい

障がい者にも健常者同様に職業選択の自由があり、そのためには作品発表の機会を作り社会とつながりを持つことが大切です。凸版印刷さんはリアルスキャンなど先進の技術やネットワークの素晴らしさはもちろん、当施設の経営理念や方針を深いところから理解と共感をいただいたことで、同じ方向で仕事を進めることができています。その結果、一進一退ながら、当初の目的である利用者さんの才能を活かせる仕事が広がりつつあります。

事業所ホームページへのご案内です。
事業所の活動を俯瞰的にご覧いただけます。

法人名 事業所名	特定非営利活動法人インクルーシヴ・ジャパン インクルーシヴ・松山 ヒカリのアトリエ
住所	愛媛県伊予郡松前町大字徳丸字松ノ西1208-4
ＴＥＬ	089-909-6556
ＵＲＬ	https://www.inclusive.jp/

地域活性×福祉

佐賀県
佐賀市

1910年創業
調剤薬局、ドラッグストア、化粧品店、
漢方相談薬局等を展開
株式会社ミズ

就労継続支援Ｂ型事業所
GENIUS

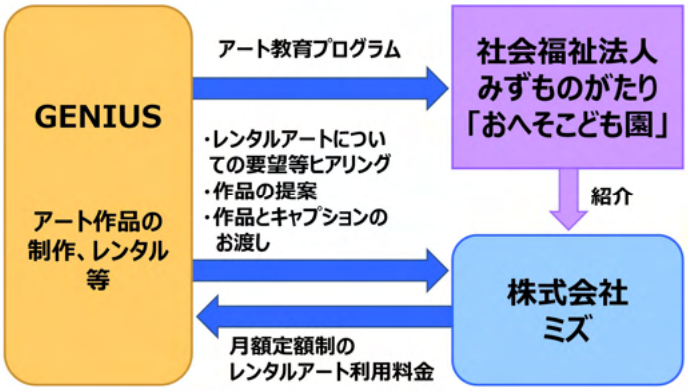
「佐賀市をテーマにバルーンやムツゴロウなどが描かれた架空の街」の作品
ミズ本社玄関ロビー

企画展で展示された作品
サガテレビ一階ロビー

連携の概要

「地域で薬局を中心に多方面にビジネスを展開する企業へレンタルアート」

GENIUSが株式会社ミズ（以下、ミズ）の会議室や玄関ロビーを活用し、制作した絵画を3ヶ月ごとに交換するレンタルアートの提供を行っている。アート作品以外では、ミズにて社員研修の記念品をデザインし、エコバックなどを制作した。また、連携協力している社会福祉法人みずものがたりが運営するおへそスタジオでは、出張型アート教育プログラムを実施している。



【連携のきっかけ】

社会福祉法人みずものがたりではアートプログラムを保育行事として定期的に実施していた。園長よりミズの代表者に紹介されたことがきっかけで、本格的な連携に繋がった。

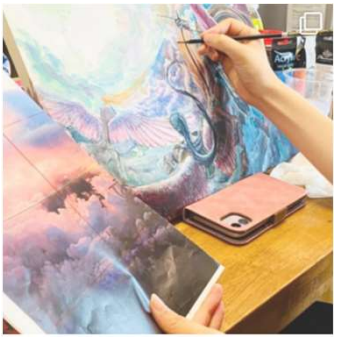
【連携の特徴】

- ミズに提供する絵画の対象や色合い等のニーズを把握してマッチした創作物の提案を行い、喜んで戴いている。
- 柔軟な料金プランや月額を設定しており、ミズの選択肢を増やしている。
- 高度なスキルをもつプロフェッショナルが担当し、アート制作についての指導体制がしっかりしているため、品質が保証できる。

【連携の成果】

- 佐賀県のリーディングカンパニーであるミズの玄関ホール等にアーティストの作品が掲げられていることにより、多くの人・企業等にも関心をもっていただく機会が増えた。
- 実際、既に８社ほどの佐賀県内企業へのレンタルアートの導入実績に繋がっている。
- 少しずつではあるが地域の住民及び企業へのアート文化の醸成が進みだしている。

作品及び創作風景



利用者の創作の様子やアート作品

【ここが違う！GENIUSの取組み】
地元企業との連携をきっかけにサブスクリプション型のサービスを開始。利用者のアート作品を店や会社に届けていきたい

① GENIUSでは、利用者を「アーティスト」と位置づけ、各アーティストが創作する絵画、デザイン等のアート制作物を販売、展示、レンタルしたり、自社ブランドのデザインとして販売したりしている。
② 展覧会等で最優秀賞受賞や入賞経験を重ねているプロのアーティストによる指導を受けており、創作物は高く評価されている。メディアにとりあげられることも多い。
③ 利用者が持ち合わせている能力と個性を引き出す環境が整っていることが質の高いアートを創作する源泉になっていると、連携先から評価されている。
④ サブスクリプションシステムの導入で企業には都度提供される新しいアート作品を楽しんでいただけると共に、事業所としては継続的な収入を見込めるビジネスモデルを導入できた。

創作風景

細かい作業を集中して

これから取り組む事業所に
WIN－WINのポイント

株式会社ミズ
代表取締役 溝上泰興氏

質の高いレンタルアートがオフィスを彩る

GENIUSでは「利用者」ではなく「アーティスト」と呼んでおり、その人の特性や個性を受け入れ、認め、活かしていく姿勢は当社の考えに通じるところがあります。また、当社事業におけるサービスのあり方やホスピタリティにかかる考え方として人財教育の参考になることがあり、それは発見の一つでした。また、現在は本社ビルでレンタルアートを展示していますが、今後は店舗等でも絵画を飾りたいと考えています。また、社内研修等を通じて当該事業所への理解を深める機会をつくりたいです。

株式会社すみなす
GENIUS
代表取締役 西村史彦氏

連携することでアート作品に触れて戴く機会が大きく拡大

「アーティスト」の作品は、これまでも様々な場面でメディア等でも取り上げられてきましたが、レンタルアートでミズ社の玄関ホールや会議室を作品が飾ることにより、より多数の人に作品を鑑賞してもらうことが可能になり、さらなる認知度の向上につながります。また「アーティスト」の創作モチベーションアップの源泉ともなっています。

作業の様子を写した映像を公開中！
利用者が実際に作業している様子をご覧いただけます。

法人名 事業所名	株式会社すみなす GENIUS
住所	佐賀県佐賀市鬼丸町7-3
TEL	0952-60-2673
URL	https://geniusart.jp/

地域活性×福祉

石川県
能登町

過疎地の雇用創出を目指し、研究を行っている
石川県立大学

就労継続支援Ａ型・Ｂ型（多機能型）
日本海倶楽部
（Healing Bay Area 日本海倶楽部及び日本海倶楽部ザ・ファーム）

奥能登エリアの観光資源・地域住民の憩いの場である「日本海倶楽部レストラン」

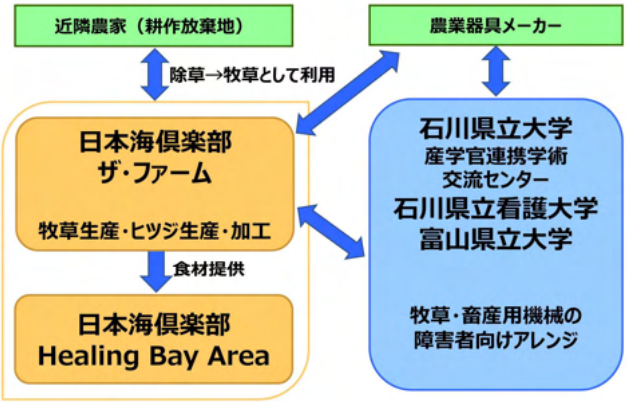
ブルワリー・オブ・ザ・イヤー2014を受賞したオリジナルのクラフトビール

ヒツジの世話をする利用者

連携の概要

「人口減の町を元気にし続ける日本海倶楽部。次の挑戦は、産学福連携のヒツジの飼育」

当事業所は1998年に地ビール醸造とビアレストランを生産活動として開設された。障害者施設初のクラフトビール事業は、地元に新しい産業と観光資源を生み出し大きな成果をもたらした。2008年には、農業を主事業とするザ・ファームを設立。生産した野菜は食材としてレストランや食品加工センターに供給される他、地元特産のかぼちゃを加工して商品化するなど農福連携にも取り組んでいる。
こうした実績をベースに、次の挑戦として現在進行中なのが、石川県立大学等と連携して研究中のヒツジの飼育である。畜産事業に参入することで利用者の職域を広げつつ、地元の新たな特産品開発につなげる計画である。大学、企業の協力を得て、利用者特性に配慮した農機具の改良を行い、利用者を主力とする新たな事業開発が進められている。



【連携のきっかけ】

石川県公立大学法人石川県立看護大学では、アニマルセラピーの研究を、また同法人の石川県立大学では、過疎地の雇用創出や耕作放棄地の活用を目指し、畜産（特にヒツジの飼育）を研究している。アニマルセラピー研究への協力を日本海倶楽部が行ったことがきっかけで、農福連携の視点でヒツジの飼育を進めることになり、上記２大学及び富山県立大学を加えた共同研究プロジェクト（生物系特定産業技術研究支援センター「イノベーション創出強化研究推進事業」【基礎研究ステージ（チャレンジ型）】採択）へと発展した。本研究では、看護学的見地から障害者の機械運転を妨げる要因やヒツジ飼育が障害者にもたらす影響等を調べ、障害特性にマッチした生産活動として採算のとれるモデルを創ることを目指している。

【連携の特徴】

- 農業を主としているザ・ファームだが、冬場の農作業には限界があり、通年で仕事ができる畜産には魅力があると考えていた。今回の共同研究は、既存の農機の改良により、特に知的障害や発達障害のある利用者にとって安全で使いやすい機械の開発を目指している。
- 食品加工、レストランでの実績を有する当事業所だからこそ、飼育の先の商品化を見通した畜産事業に参入ができる。
- 利用者の職域拡大、工賃向上という成果指標を明確にして、共同研究が行われている。

【連携の成果】

- 共同研究は今後令和10年まで続く息の長い事業であり、目に見える成果は出ていないが、AI、ICT技術活用による障害者向け農機改良は、採算性の高い農福連携の新しいモデルとなることが期待されている。
- 地域活性を図るうえで、「関係人口」を増やすことが重要という認識のもと、新たな挑戦を続けている。それにより、当事業所に関わり、応援してくれる人の輪を確実に広げることができている。

畜産関連の農機具改良による利用者の職域拡大の視点

想定している作業	利用者が作業を行う上で想定されるハードル	改良視点
牧草生産 たい肥散布、耕転、播種、刈取、運搬。これらの作業工程に対し、機械を使った作業を想定	**農業機械学の見地から** 機械操作（操作力・可動範囲）騒音（エンジン音、モータ音）、レバー操作（手順理解、タイミング、速さ）など	・レバー・スイッチの数が多すぎる ・動力音が大きい ・手順が多く、複雑
	精神看護学の見地から 機械操作を不得手とする要因、機械操作に消極的な要因	・不具合時の対応（刈刃停止時の対応）など

＊対象利用者として、知的障害・発達障害のある利用者を想定

【ここが違う！日本海倶楽部の取組み】

地ビールレストラン・農業に続く新たな連携プロジェクトも、地域に人を呼び、活力ある町をつくる１手段。やらない理由はない。

① 社会福祉法人佛子園の考える地域連携は、まず福祉事業所があって、周辺企業や関係者と連携するという考え方ではない。地域課題を解決するために事業として何を立ち上げることが望ましいかを探り、自治体、地域住民、関係者と話し合いながら事業計画を立て、地元の理解を得て事業所を作る。

② 地域住民と共有した人口減少という課題に対し、日本海倶楽部の事業を通じて、地元の賑わいが復活し、町が活性化することを目標としており、利用者がここで働くことは地域に貢献することに直結している。

③ 地域のリソース・強みにも着目し、県内でも特に一次産業に携わる人口が多い地域であることから、農家との連携、協業にも力を入れてきた。ヒツジの飼育という畜産事業への参入は、その延長線上にあるもので、耕作放棄地の活用や地元特産品の開発により、さらなる地域活性を目指している。

農機具を利用者が操作することで、生産性向上を目指す

これから取り組む事業所に WIN－WINのポイント

石川県公立大学法人石川県立大学
産学官連携学術交流センター
コーディネーター（名誉教授）
石田 元彦氏

耕作放棄地を牧草地に変える推進力に

日本国内のヒツジはわずか17,821頭（2017年）で、国産の羊肉は貴重です。日本海倶楽部の皆様と協力して少しでも多くのヒツジを生産し、地域の飲食店に活用していただくことを目指しています。今回の飼料生産用機械改良は、障害者の働きやすい環境整備と労働生産性の向上を目標とするもので、障害者福祉と地域活性化のお役に立ちたいと思っております。

社会福祉法人佛子園
日本海倶楽部
管理者　竹中誠氏

地域課題解決のスキームで事業を構築

地域課題に目を向け、解決の役に　立つために何ができるかを考えて、日本海倶楽部を創設しました。町や住民とひざ詰めで話し合って計画を立てたんです。そういう意味では開設時から地域産業との連携があったということです。地域一番の産業が一次産業だったので、自ずと食に関わる仕事や農業に取り組むことになりました。就労支援事業所は「事業」を通じて地域の役に立てることが一番の強み。おかげさまで多くの方が関わり、応援してくださっています。

こちらから、事業所の詳しい情報をご覧いただけます。

法人名 事業所名	社会福祉法人佛子園 Healing Bay Area 日本海倶楽部 日本海倶楽部ザ・ファーム
住所	石川県鳳珠郡能登町字立壁92
ＴＥＬ	0768-72-8180
ＵＲＬ	http://www.bussien.com/nihonkai_club/